

第十五編 雜

志

第一章 洪水

一、寶曆七年七月十七日出水田畑被害板野郡全村に及ぼし同七年七月廿六七兩日大風雨潮打御藏給知  
共年貢御免

一、安永七年八月八日より三日に渡り風水害あり (板野郡舊記)

一、寛政四年七月二十九日の暴風出水などには神社倒木田畑川成も多くて孰れの神社も祭禮が出来ん  
と書いた記録も残れり

一、同年洪水に堤防數ヶ所破損し大豆皆無同様稻五步作損毛 (鯛濱村附近古老談)

一、文化十三年子八月二日荒潮打込稻大半立枯

一、天保十四年卯七月五六兩日晝夜大雨降溜壹丈三尺にて大洪水流家多く其際五十年來の大水なりと  
言へり

一、嘉永二年七月破損地上平均七尺流家五六軒稻毛損傷少からず此年收穫平年の六歩位にしありしと

一、嘉永四年酉の大水は阿房水と稱した位で水嵩も深く被害も多かりしと稱す (川内村中財 熊雄氏所藏文書)

一、嘉永七年寅十一月五日より連日大津浪地震にて潰家夥多あり

一、安政七年申五月十一日より十六日迄七日間大雨洪水國中大半入水  
 一、萬延元年申七月十一日大風高潮津浪により青毛立秋徳島より撫養に至る海邊被害貳万貳千石餘徳島より南方海邊に至る被害五万石餘年貢御免となれり  
 (板野郡記録)

一、萬延元年申七月十一日聊之間暴風に候得共夜七ツ時より大潮にて津浪出來仕小松新田長原浦米津新田富吉富久下別宮宮島大潮打にて稻毛大疹に相成撫養塩濱大荒岡崎拾人衆家潮に被引南方答島橘浦小松島松原海邊總て大荒迷惑仕候米作大疹麥作は夏大疹申八月末之比米相場極々高直新米百五拾匁九月中旬に至り米八拾匁麥他國極上六拾匁他國麥御國へ積込御免被仰付候  
 同年早稻米百五拾匁迄追々引上節季に至り米壹石貳百匁麥壹石百九拾匁翌年酉正月に至り米貳百八拾匁麥貳百匁に相成候儀に市中之内におゐて事の外無少には壹升四百三拾匁小賣樹にて極高相場八匁四分替に仰付候尤店卸之義者不仕油五合より上々升目賣り不申乍併撫養油小賣九匁店卸之義は壹軒前油三升よりは賣不申候  
 (川内村中財熊雄氏所藏文書)

一、文久三年午の八月十二日の夜水なり此出水には板東の谷川非常の増水なりしと見えて堤防の決潰破損は三十餘ヶ所に及び延長殆んど六百餘間百姓共は非常の困難なりとて勸農普請を出願したる庄屋よりの歎願書は左の如し以て當時の慘況を推想すべし

乍 恐 申 上 覺

- 一 長十九間程 川原場 谷川除石堤崩 兵四郎西 一同四十二間程 右同斷
- 一 壹ヶ所 彌太郎西 石藏 右同斷 吉成寺西 一壹ヶ所 同 右同斷
- 一 壹ヶ所 善助西 右同斷 長井ノ西 一長四十三間程 石堤
- 一 長十一間程 内二十一間程切込申候内二十二間程は腹崩 但右之根通石破戸數ヶ所被爲仰付置候處破損仕候 權助西 一壹ヶ所 石破戸 右同斷
- 一 長六十間程 野神 石堤破損 此根通石數ヶ所藏被爲仰付御座候所右同斷
- 一 七ヶ所 同所、上より馬場上迄 石破戸破損 一長六拾八間程 同所 石堤切込
- 一 長五十間程 下井ノ西 右同斷 一七ヶ所 石破戸破損
- 一 用水井理壹ヶ所 上井ノ戸 右同斷 一壹ヶ所 綴谷屋谷 所用水川原堀埋
- 一 長八間程 同處井口 石堤崩 一壹ヶ所 山伏屋井口 所用水川原堀埋
- 一 同所埋井利六間敷流失仕候 一壹ヶ所 淨土寺 所用水川原堀埋
- 一 長拾六間程 同處井口 此内十八間程埋井理被爲仰御座候所拾四間程流失同四間取留御座候 一同六間程 同和、下 石堤根はれ
- 一 同三拾四間程 同所下 石堤破損 此根通石破戸數ヶ所右同斷
- 一 同拾四間程 同所下 右同斷 此根通石破戸數ヶ所右同斷

- 一同拾四間程 同所下 右同斷
- 一同拾九間程 塚はな 石堤崩
- 一同四拾五間程 善兵衛東 石堤破損
- 一同四間程 善兵衛東 右同斷
- 一同四拾貳間程 同 右同斷
- 一同六間程 牛ノ宮北 石堤崩
- 一同八間程 同所下 此根通石數戸二ヶ所同斷
- 一同拾八間程 悪左衛門東 此根通石破戸同斷
- 一同拾六間程 同所下 此根通石籠數ヶ所右同斷
- 一同十間程 同所下 此根通石籠右同斷
- 一同八間程 同所下 此根通石籠右同斷
- 一同拾四間程 坂田 堤切込
- 一同貳拾五間程 十七 右同斷

右之通當村勸農御普請所は十二日夜洪水に破損仕奉迷惑仕候此後少々之出水にも押込麥作取調不申  
 場所も御座候に付百姓共至極奉迷惑仕義に御座候間乍恐御慈悲之上御見分被爲遊御普請致仰付被  
 下候は、難有可被存候以上

文久三年午ノ八月

庄屋五人 與

御目路見所様

是れより先寶曆前後に數度の大水ありしも板東町の被害はものに見えず其後の文書に遺りたるは天明  
 六年午九月七日の出水と寛政年間數度の洪水なりとす天明六年午九月七日の洪水に板東方面は田島に  
 砂入荒地を生じて鍬下及追鍬を受けたる事實は田制に譲りて寛政年間のもの述べし同三年八月廿  
 日洪水ありて永井日向の所有地治鍛屋の前上田三畝九歩は川成となりて五ヶ年の鍬下中翌寛政十一年  
 九月六日の洪水ありて復舊工事は困難なりとて四ヶ年の追鍬下の追願書に取立人嘉六は奥書奥印の上  
 給人山田種太郎の手代中島嘉太郎に指出したる跡書なり

以上は板東方面高地の水況なるも其他低地吉野川に沿ひたる低地の狀況は大率推量するを得べし  
 人口に膾炙して昔語に残れるものは嘉永二年の酉の水と慶應二年の寅の水なり酉の水は世人呼で阿房  
 水といひし位の大水にて津慈なる飯の内即ち阿部家の南方百間内外破堤し同家は流れて萩原の鹽田ま  
 で至れりと津慈の破堤のありしが爲めに川崎以東は破堤を免れ水量も亦割合に淺くして川崎にては普  
 通の民家座の上の三尺最高の家なれば一尺内外三俣にも大同小異なりきと其他北方の高地に於ても堤  
 防の壞決田圃の荒廢等は非常なりしも人畜の死傷はなかりき然るに寅の水の如きは命の有無に拘はる  
 一大悲劇を現出せり今其概況を述べれば慶應二年七月の末より八月の初に至りて霖雨蕭々として降り  
 續き所謂厄日の八朔に篠突くばかりの大雨と變じ二日三日は卯の毛を散らす細雨と化して遂に前代未  
 聞の大水となれり檜板東萩原は谷川溢れて怒濤を起し谷除堤は押破られ田圃は大いに荒らされて損害

誠に莫大なりしも人畜に傷害なかりき津慈川崎三俣の方面に至れば頗る悲惨の状況を呈せり殊に夜中の出来事なれば周章狼狽一方ならず津慈にては破堤三十有餘間高きも座上三尺以上低きは軒を浸せりと三俣にては上流破堤の狂瀾を蒙り酉の水より二割以上の浸水なりしも人畜等に故障なく田圃の砂入泥置位に止まれり然るに中間に位せる川崎にても惨状を極めたり渡場上りの大井利附近二十間餘の破堤と共に怒濤の衝に當りたる富屋の寢床質倉及同家の南堤下なる齋藤竹五郎の建家全部即ち母家床納屋悉皆押流され堤外なる濱喜右衛門方は相當の材木屋なりしが材木は勿論建家全部を流失せり中にも最も憐れなりしは喜右衛門の東隣に住ひし達五郎一家にして同家は家屋の倒壊すると共に達五郎夫婦母息子馬諸共に壓し殺され家屋と共に十間下流の松の下にてかかり居たり其他東西方願五十間新道地三十間の破損ありて酸鼻の極に達したりと

(板東町史)

應神村は三面川で包まれて居ることゝて慶應二年寅年の大水には水量高くして前に名高い酉年よりも一尺有餘も水嵩高くて被害も随つて多かつたといふが今其の概畧を述ぶると七月朔の朝よりしめく降り出して三日には大雨となり霖雨に附込れば川々は追々増水し始め七日夕には古來稀なる大水となり出た殊に九時から十二時迄は暗夜の事とて防禦の途なく西貞方では助次壘の堤防が崩壊して一丈有餘の水嵩となり倒家多く壓死するもの十人東貞方には壓溺死七人中原では別宮八幡前の堤防の上を越すこと五六尺の水量で八人の死者を出した此外田畑の被害も多く倒家及流家中は中原に七軒西貞方の小島に三軒あつた是亦地震と等しく古川方面には被害も格別なかつた

(應神村史)

慶應二年八月の洪水甚しき其前後今日に至る未曾有の大水にして宮川内にて田圃段別凡て三町歩餘の荒地不作地となりたりと

(板野郡記録)

同年八月七日未曾有之洪水破堤砂入池成損田拾五町歩秋作田畑共皆無同様轉家流失家數十戸流死數十人

鯛濱附近 (右 同)

同年八月の頃洪水の爲め下庄附近にては田野人家を損せしこと夥多より爾來年々歳々出水の爲め沃壤たる耕地は砂石入或は押堀より全村中には荒地となれり

(右 同)

同年五月及同八月の如きは未曾有の大洪水の際大寺川端等は上板敷村の泥水浸壓し水勢猛劇にして干水後耕地の荒損甚敷自然收穫僅少にして翌年の種子に缺乏を來せしと云ふ

(右 同)

同三年の水は阿房水より一尺有餘も高かりし當時最も悲惨と聞くは新居須の濱藏の家族のこと、つね梶次郎の三人は西貞方大工板東信助名東の大工伊平の五人が小舟に乘込み避難しようせし折柄吉野川の堤防名田境から切れ始め徳命分二百間見る間に崩壊せし結果小舟は轉覆して信助を除く外皆溺死を遂げたといふ

此大水にては徳命元村の宅地に深水七尺以上に及び中富では大塚の堤防二百間も破壊し殊に夜の事とて人畜の死傷多く葉藍藻藍藍玉流失損害は非常なるものなりし

(藍園村記録)

一慶應二年寅八月六日戊刻より連日大雨未聞の大洪水に居宅流失する多く死人各郡より書上壹万人餘なりと云ふ

一八月東中富鎚場傍堤防五百間破堤間地所拾五町歩堀流れ他の畑宅地は悉皆砂入となる家流五十戸死人三十人  
奥野附近 (板野郡記録)

一同年の出水堤防數ヶ所破壊地上壹丈の高となり一戸として座上せざるなく流家數十軒人畜死傷稻毛の損害少なからず  
大松平石附近 (右 同)

一明治六年酉十月三日大風雨洪水にて去る慶應二寅年より凡壹尺低しと云ふ

一明治六年八月及同九年九月大洪水田野は大害砂漠の如く人家は戸々浸水し所々流家あり堤塘は數ヶ所の破壊其實に少しとせず  
牛屋島附近 (右 同)

明治卅年九月風雨洪水の際水災被害のこと天聽に達し憫然に思召され今般恩賜金下賜濱田キン外八名明治三十二年七月九日前日來の暴風に依り吉野川筋は非常の出水にして殊に堀江松茂の両村堤防尤も危険を究めたるに依り警察官出張し防禦につとめたり當時出水増加し堤上漲り堤防數ヶ所決潰せし爲め堀江松茂大津の各村は大海の如くに變じたり同日午後十一時頃に至り前記各村に浸入せし水勢は撫養町南濱齋田木津に押來り町民は數十年來水害を受けたる事などを以て安堵睡眠中俄然の浸水なりし爲め町村周章狼狽し商家の商品民衆は家具の流亡するも己に生命を安全ならしめんとし之を

顧みるの違なかりしを以て商品家具の水浸し流亡せしもの多かりし同夜警察署に残留せし巡查は各村に出張し浸水激甚なるも之を顧みず専ら町村救護に務めたりしを以て一名の溺死者も出さざりし翌十日午前二時同町文明橋は吉野川筋より流下し來りたる本村内家屋に堰をかけられ中央より陥落し通行不通となれり

同日午後に至り漸次退水するに至れり此洪水の爲め前記各村の外一般に於ても堤防決潰農作物の被害流失品の被害多かりし此洪水災害に付ては

天皇陛下より特に本縣下に東園侍從を差遣せられ本郡内に於ける災害の状況を親しく視察せられたり

明治四十年年度水害状況連日の大降雨により吉野川々水激増し濁流狂奔し各所堤防を決潰す大津村吉野川支大谷大代新池川撫養川三石入江の水勢又侮る可からず遂に堤防決潰八十五ヶ所其延長二千八百二拾五間に及び大代の極小區域を除くの外全部浸水す人家の浸水座上四寸乃至四尺に達す加之潮水も亦浸入し來り其被害を蒙り慘狀名狀すべからず家屋の破損諸器具の流失或は浸水に由り廢物に歸す最も夥大なりしは稻作被害殆んど皆無となる引て租稅收出上に及ぼすや影響甚大なり

大正元年九月二十二日より二十四日に至る及十月二日

水量田地面上壹丈 但潮水浸入は約五尺

一堤防切所二百十四間  
 一被害全村に渉る  
 一被害作物種類 稻田大豆芋甘藷梨  
 内收穫地皆無地概數 約十町步 荒地 約四十町步

明治三十五年の風水に對し

明治天皇 皇后兩陛下の恩賜金及衆慈善者義捐金を左記標準により配布方郡より通達あり

死一人に對し三圓 負傷者に對し二圓 流失埋没全潰一戸に對し一圓二十五錢 (撫養警察署調)

大正元年九月二十一日は朝來快晴でありしが午後三時頃より降出し翌廿二日午後六時より増水を始め二十三日正午には寅の年より二尺乃至三尺水量の高さを覺わり午後二時より減水を始め二十四日午前四時には交通開けしが防堤の決潰等もありて被害は非常なるものなりしが併し寅の年とは違ひ白晝なりしにより比較的慘狀を演出すること少なりし兎に角空前の大水にて大寺分署管内被害を聞くに

溺壓死九、斃死畜一〇、被救助人一、四三一、流失家屋七三、全壞家屋五二、半壞家屋三一、田

畠流失及埋没五町五、堤防決潰三ヶ所延長三百間、浸水家屋一三〇、浸水田畠(五一八町三反)

道路破壊三ヶ所延長四〇間

(板西町史)

## 第二章 地震 暴風

### (一)大地震 實錄

千時嘉永七寅年十一月四日朝辰の下刻俄かに地震ゆり出し何れも外へ走り出火の要心第一に取片付居申内所々建家相痛申由相聞へ申候彼是煙草四五服吞位之間震り申候尤同年六月十四日之夜九ツ半時に大地震にて何れも驚入其節の地震後にて承候處伊勢之國四日市抔は祇園祭りて而火を扱大震りに而人家潰に火煽り大火に相成候由伊賀國上野城下御家中町家一圓震り潰し其上御城藤堂和泉守様御本城震潰し同國にて凡百三拾軒程の一村亡處仕深二三間の池に相成候趣も承り候江州世瀬之御城角櫓震り潰し候趣越前福井御城家中市中不殘潰家に相成其上火煽り丸煽之趣地震に火の要心第一と申事何れも聞兼而得心仕其節大阪にて地震に出合候人より承り候者土地割除に疊を出し其上にて神佛を祈り夜明し致候儀直咄に傳り右に就萬端地震之心得御生候處同年寅の十一月四日辰刻大震り仕砌火の用心仕其夜跡にて二三度少々震申に付何れも要心之こゝろ持にて居申所翌五日申刻誠に天地覆る様相覺其節夕飯の拵焚火を消し火鉢を外へ持出し召仕喜兵衛義は宵の地震より配り付置候馬を追出し炬燵我等内には前日より震候にも不仕候日の入合迄壹時程の大震其節我等百姓寺へ參り居合せ寺中一時に外庭へ走り出候處方丈之内襖障子震離れ仁王門きいゝと震鳴凡壹間半位七家根にては震り申様に相見え申候就夫釣鐘も棒に自然と震搗當り早鐘鳴ごとくなり石塔もことごとく震動中々庭に居る事不能寺の西屋敷へ垣を潜り出候處桶屋清藏居宅震潰れ夫れより火煽に烟り出申には其方へ參り火取消し手傳仕夫より或家へ罷歸り候處先我家建物無難にて御坐候東鄰伊太郎西隣吉右衛門前隣り角太郎近藤隆輔善八裏隣

藤藏油仕棟梁力藏中堂妙般合四十人程我等西藪中へ皆々顔色なしになり大人子供に至る迄泣々も眞言を唱へ居申候内林内潰家出來の趣承居申内徳島内町焼小松島焼西町焼築地西の方は空邊所々焼近村にも古川中喜來沖島善集寺出火したし其夜戌刻に至り大震りに而藪の中竹に取付居候手引放るゝ様に相覺え申候此事跡に而不思議に被存候は竹か動は人か居所も動く道理に存候得者は計不思議に被存候五日目夜も貳拾度位も震り馬を敷端に繋置夜九ツ時に至り漸く藪際に而粥を焚き給へ候得其中々咽に通りがたたく然共寒中に而冷入候際に少々宛吞申候皆々藪中にて夜明仕翌六日早朝に承り候は加々須野來津新田亦是別宮邊土地一圓震裂土砂水を吹出し鯨の潮吹くこと地毎に數所出來白海の姿に相成其上宵の大震り後所々津浪參り候由承り村内他村に至る迄宮島金比羅様御影に而津波のかれ候様言廣り參詣人の往來續き我等も則參詣仕道筋段々潰家御坐候又は土地より砂水吹き上候跡且一二尺より四五尺迄の地割目喰違等も御坐候須賀村中堤一丈も震り他へ吹出し埋り却て堤より池高く相成候運に御坐候金比羅前堂回廊潰れ道筋土地高低相見へ申候六日朝巳の刻に至り俄かに金比羅御鬮に津波來ると申由にて三里空へ登る歟左もなくば此邊にては命保つ事いたし難由何れ共なく言出し廣り村中始め蛭子野來津新田邊の人々我等門前を西へ泣々走る者もあり亦脊に年寄病人を負ひ逃る者もあり馬に乗り竹輿に乗り飯櫃を抱え走る人もあり着類を持運ぶ人もあり子供を抱え着替持候得共逃り行く邪魔に成捨て行く人もあり道筋に白毛綿端物着類等段々落し候處見及候雪駄を脱き足袋にて逃る者もあり馬の繫を

切捨て追放し行くもあり子供年寄生木に括り付け萬一津浪の難にて可死共骸不動様仕居る者もあり狼狽周章逃る者つゞきけり誠今は一生懸命と宵の地震より戸棚簞笥外へ出し置人も其儘慾捨て明家として我先と逃走る等藪の中なる人々一時に逃れ去り我内種太郎母が抱き孫太郎兩人へ小遣錢少々宛人別に相渡下女召連空邊さして逃候様申聞候得共孫太郎我等に別れおしむ一向逃不申無據我小家を油仕棟梁力藏へ頼置中島渡迄送り出し候砌召仕喜兵衛義は馬に乗り榎瀬村親元へ駄付親道藏家内船にて空逃行候折柄にて馬を榎瀬に繋ぎ置直様船に乗り逃參り候我等義者中島惠勝寺門前にて承り候は中島渡船一人も渡し吳不申由承り就夫我等惠勝寺堀抜に而垢離を取り觀音へ御鬮を入れ候處我村に止るべしと御鬮にて夫より家内召連れ我屋敷へ罷歸り其節七八拾人程右御鬮に隨ひ歸る人有之候戻り候道筋繋ぎ切離候馬喰合も御坐候騒々敷有様夫より我等假小屋へ歸り藪にて六日の夜明し仕矢張り時々少々宛震り申候其節津浪除け高一間半程の床を三疊拵年寄子供女分上げる積にて大人冬青樹へ登る積り仕置誠に大勢參り請床拵に當惑仕候當村内にも親は我等小屋へ歸り子供の行先知れ不申子供戻る家もあり親の不戻家もあり離れ／＼に而一兩日はあはれ成る人々多く御坐候其砌跡に而承り候處高房亦是古川貞方奥野下庄邊迄も追送りて逃げ候趣傳承り二三日も板東檜山邊へ參り逗留仕候者も御坐候其砌跡にて承り候へ我等召仕種太郎もりの娘榎瀬龜藏後家姉共參人檜山へ逃參り三日程逗留仕候其跡に而諸方一二統儀は盜賊の申觸様被申人もあり亦來津新田一圓川の如くに相成最一度大震有之時は土地滅亡仕様

にも被存新田一統之者其中々永居する事いたし難く様奉存候是等之騒ぎ逃候儀は至極尤成義と奉存候夫に付添逃人出来候方とも奉存候是等之騒ぎ逃候儀は至極尤成義と奉存候夫に付添逃人出来候方とも奉存候長原浦は川筋船に而浦中皆々逃候趣に御坐候笹木野廣島も何れも大谷木津山へ逃去り候由霜月七日朝辰刻大震に而御家亦は端々に出来之由夫より築山之裏南手に小屋を再懸直し候砌兎角日々夜々度々震り候時小屋より本宅へ用向て這入申儀おそろしく奉存候十四日大風大雨にてこゝろも少々相弛み小屋を離れ我家へ這入寝臥いたし候得共漸く南坐敷の窓下に家内上下一所に寝臥いたし其年は炬燵不仕着替を度々仕り並へ浮腰に而寝臥仕候十六日四ツ時大雪風雪降の姿へちま壹本わたぎつむなかく候位之大婦さ之雪降り聊之間に壹尺程積り申候誠に老人たりとも覺へ不申大雪大風是にも建家吹倒し申候天地之狂ひ恐怖仕候未だ日夜震り申候霜月廿五日大雨にて地鳴夥敷仕何れも亦々消入居申姿最早神佛に祈誓を懸け我等家内金比羅へ七日之間氷りし朝はだし參仕四拾日之間氏神日參拾五日の間金比羅別宮八幡鹽竈鹿島明神並秋葉山愛宕山へ光明真言慈救呪右八社へ御神號とも奉唱其跡にて大師觀音諸菩薩真言日夜家内共打揃奉念誦候今以日々震りにて何れも外へ出る計にて戸の口にて猶豫仕居申内震り止み我等家には下地疼等無少ゆへ南坐に寝臥仕候得共外家により亦々小屋懸仕外にて寝臥仕候家も出来いたし候十二月十六日夜大雪降りにて其中にも矢張り震り申候村中之内は地震怖人は十二月二十日頃迄外之小屋に寝臥仕候此節に至ても度々震り申に付此上大震仕節混雜無之様終末の配り申聞置

候處寅の十二月大三十日朝五ツ時し大震り仕是にも御家端々に有之由種太郎母が抱き外へ罷出孫太郎下女並も皆々外へ飛出し我等は神祭り仕折柄朝飯汁焚き下女も走出居合不申に付直様釜の前におり火を消か如何仕哉と被存候内甚た震り強く相成申付無據水瓶之水釜の下へ流し込み其儘外へ飛出申候共節召仕喜兵衛義は油懸取に參り居合不申に付夫より馬家へ這入馬を追出し其節は震止み申候孰れ日々震りに而大抵火杯を消事震りの大小運指別考消申に付追出事是れ遅なはり申義に而大晦日俄に馬の假小屋を懸け入置申而より一段氣安く相成申外方にも同斷仕家段々出来申候此大三十日震後四五之間は中震り位之事四五度も御座候卯正月五日頃より炬燵仕候得共其片脇に惡水小桶に水を入れ置申候火鉢には土ひんを懸置是を以て要心水の心持に御座候卯正月共少々宛日震り三四月に至り而一ヶ月の中に而拾度位も震り五月同斷六月頃は四五度に相成七月頃には大方震り留り可申方八九月五六度震り兎角海の潮高く村添堤外島地に潮満込心配仕候卯九月十五日助任八幡祭禮場之筋へ潮満込かけ馬走る事出来不申様に相成申候

## 地震潰家大破有増

大松村 一、潰家拾貳軒 大破損八軒

但中島境より五人組儀左衛門裏迄三拾ヶ所程地毎に裂目より土砂以上前の地藏角邊行詰邊五六ヶ所裂目より土砂吹上宮寺疹無少氏子壇家仕合に相成り我等方土藏壁破れ申候居宅別而之事無



御坐候

中島浦

一、潰家拾軒

大破七軒寺方丈潰れ申候觀音堂大破

但寺之前より大松境目迄割目より土砂吹上走り水位之事に御坐候北の手大手堤内の地へ震込下り申候其外堤に疼無御坐候原金藏西池二つ御坐候間之地五畝程麥地開田に震下り川向中島鴨ヶ淵南麥地壹町七反程砂吹上大荒に而其上三尺程震下り開田に相成其所外田等も少々宛下り申候北渡し場迄四尺程震り下申候様相覺へ時々潮満込申候

榎瀬村

一、潰家九軒

大破拾貳軒 寺大破

但し鹽竈潰本社震潰れ九鬼土砂吹上壹貳尺より六七尺迄割目夥敷御坐候真に裂目長百間程之處段々御坐候誠目當怖敷難見様之事並南北原境新田杯真直なる田地の岸種菜植地に畦立置候地半間位も震斜に後に而地盤姿に直申候何方も大狂ひ之所は同斷之事に候

加賀須野村

一、潰家七軒

大破六軒

蛭子宮潰れ中用水より北へは土砂吹出下六衛邊は大荒にて土砂夥敷吹上川之如くに相成跡に而砂取捨地毎に數百石出申候川筋は津浪壹丈程參り申候由下吉衛築新田大荒白海之如く相成何れも五日震旱々近村へ高所逃げ申由往來渡場居地震後下り月毎に大潮時々店々へ入潮仕大に迷惑仕候

竹須賀村

一、潰家三軒

大破三軒

但兼子大松井利より平石井利之間拾間程五尺程震り下り裂目一尺五寸程も御坐候同中堤竹須賀番非人之東長二十間程一丈震下り北は平石水南宮島用水一所に相成申様に罷成り南手池へ堤震込堤の松杯は水中に相成申候同堤東平石鍵屋の南長二十五間一丈程震下り南宮島用水へ震込池より道窪き様に相成申候

平石村

一、潰家六軒

大破七軒

但蛭子野天王社總潰我等蛭子野控地少々宛土砂吹出申候小屋場松の木貳拾四五本土地震下り候哉亦は其年卯夏沖の潮高く候に付惡窪地惡水捌あしく候哉右松枯申候富久富吉新田杯は土地裂目多く御坐候建家儘一二尺も震下り候所も御坐候何れ荒々迄記置申候

宮島浦

一、潰家二十八軒

大破二十軒 寶生寺市丈潰れ圓明院大破し相成候

但金毘羅別當回廊潰れ浦中不殘御社へ寄參り申候津波之節海中へ火の玉飛び御靈驗速に拜仕候人有之由御西丸御隠居様御祈念被遊御祈禱別當より被仰付候に付夫より別而參詣人多く御座候誠に此時は何れも眞實也諸方諸着類杯小屋杯に置逃候得ば紛失之家一向無御座候

鶴島浦

一、潰家四軒

大破八軒 寶福寺方丈庫裏共潰家同斷に相成申候

但氏神荒神拜殿潰れ鶴島川向新田東土砂吹出元浦土地狂ひ無御座候

鈴江村 一潰、家三軒 大破七軒

但村中土地堤等狂無御座候

沖島村 一、潰家十軒

大破十軒 善集寺庫裏座敷潰家其上焼失仕候毘沙門堂大破

但鳥井開北土砂地毎に吹出川向西新田數百間裂凡一二尺より六尺程割目出來仕其上土地一二尺位も震下り卯年中始終潮入豆粕共皆無に相成申候別宮五反地間堤總て三尺程下り五反地より北

原邊迄三四町砂にて麥一圓埋り海の如く相成申由沖島渡船の川津波の節□りに而通り人御座候潮參り船等も扱出來不申時もあり候川水一圓沼に相成申由尤土地下り候証據は堀拔之背三人程

も地盤より土地離れ上り申運に御座候藍園井戸下より砂にて震埋り候類多分御座候  
米津新田 一、但新田中白海の如く相成百姓不殘蜘蛛の子散る如く所々へ參り申候

長原浦 一、潰 家 大破五十軒

但浦中一統船にて一時逃去り百八十軒之内坂本米藏並召仕男一人都合二人止り彌右衛門内所今も知らぬ産人にて家内無數據止り候由與右衛門家七人の内二人熊野へ船に乗り參り殘五人の内

四人迄子供右之仕合内義不得止事残り止り申由跡百七十七軒悉逃凡七八日之間總留主初めて歸り候人は飯米調べに困入申由に御座候

二、本郡松村郡宇太郎地震大潰に付見舞參り道筋見及記

霜月廿一日宇太郎方へ見舞に參り候道中島渡場一二より五六尺裂目出來仕長七八十間位之割目夥敷御座候中村潰家三十軒北村三十軒程馬詰新田土地割目夥敷御座候北村往來東西土地より土砂吹上候跡多分御座候馬詰道筋潰家七八軒相見へ申候道外知れ不申宇太郎建物三間に六間土藏一ヶ所四間半に八間之居宅二間半四間隱居家二間半四間店二間半四間納屋一ヶ所棟敷五ヶ所潰申候尤松村西在高島村五十軒之一村三軒無難残り丸潰れ相成申北方中之大落に御座候松村十三軒程潰れ戻り道筋姫田村潰家無御座候大幸村十七軒潰家相當り長岸村氏神表邊土地より砂水吹上げ候跡多數御座候一枚地に百一尺五六寸之高低相見え申候中々當時田作は出來不申潰家十軒見當り中喜來浦土砂吹上潰家二十軒御座候由浦中用水堀惡水堀不殘震埋り一面田島一様に相成水道無御座候向長岸新田大裂目御座候様相見へ申候新田裂目夥敷御座候新田碑水吹上候由に御座候

一、鯛濱村百八十軒之一村七十五軒へ家出來仕候同村濱繁八茂吉五日大震りにて土砂震出し候に付無據馬初放し何れも逃候處野中にて馬勿合いたし裂目へ二疋の馬這入埋り其後震ひしすまり右茂吉馬を堀上候節又々震出し跡繁八馬其儘にして皆歸り最早跡之馬生ながら埋り死したりと思ひ候處翌六日朝堀出しに參り候得ば馬の襟より上出し顔計り相具へ眼をきろくくと仕居申候に付人々右馬を堀出し候得ば一向得向き不申如何成行候哉と困入候得其人々昇ぎ歸り一兩日仕内如常動き申候砂にて一埋故血通ひ留り様相成申運に御座候

一、新喜來村庄屋龜吉娘家内男折悪く留主にて居合下申處五日夜大地震にて馬を母親と兩人して追出て這入候處一向馬出がたく候に付木にて擲出し漸母親馬共無難に外へ出申候娘義は少しおくれ馬家潰れ打れ即死仕候

一、長原浦手習子師匠内室長原渡船にて男女四五人乗り渡海仕御津浪にて難船仕男分は米津へ上り逃候右内室壹人流死仕右死体米津新田堤の下五日程其儘に御座候漸逃候人々歸り葬り候由に御座候  
一、撫養岡崎村津波參り船にて二十人流死仕候潰家三步通御座候二通程は焼失仕候誠に大落に御座候右の通御國中諸所に至迄大落空筋上郡邊新田地土吹上候運山分は山の崩におそれ夜分は狼狽地震におそれ徘徊仕申候由承記置事(以上略)

(川内村中財熊雄氏所藏文書)

敬 燼 碑

維皇嘉永甲寅年仲冬初吾天慾哺〓爾山鳴地大震堂閣人家多倒顛黃壤壁烈水洑沸茅蘆棚〓火忽燃紅光數穗衝天起海潮湧泗漲桑田桑田既見湛似海陸谷誰疑在變遷火也水也或可免誰恐地裂陷黃泉加旃寒威砭肌骨所在履冰又臨淵未然之事無可待八寒焦熱急現前心鬼蕩々進退谷縱有羽翼何得企飛禽墜地走獸寔展轉如鷄僵且眩禦寒無褥饑無食或坐竹中或上舟火熾水加地愈震驚險何者能比焉厥明六日震漸小人意稍侶解倒懸乘噴有語恠者〓一口訛言千里傳漫言白浪滔天至里民驚亂似絮嗣扶老携幼擬避浪陸續望山櫛比連門戶放開無人住千村万落絕炊烟祠壇梵場及培塿鳥合螻集幾万千糜粥搏食有施物僅極飢腸眞

可憐在山數月如夢幻遽然省悟初得還雖還無家不傾危菱舍草枕尙依然十二月晦復天震餘震踰年尙未悽自土至相千里強以海漁浦泊村莊漂家流亡豈殫記洋中商船摧在岡十圍松杉堰泛海遠三駿路東海傍行旅三日不火食湖北湖南諸州荒浪華船死以千數失家失資多散亡信威德必勝不評惟吾封内少死傷希有蕃異縱如此仁明在上任賢良有司普行賑窮惠耕具漁具及資糧君不見萬國東頭日初照赫々皇州神封疆神賜前鑑非無醫般樂意赦能釀殃朝議新宣安政同國張恢親民綱愷悌君子民父母不黨不崩祝無量

安政第三禊次丙辰孟春上六日

夢 嚴 觀 撰 併 書 三木與吉郎光治建  
新 居 謙 篆 額 石工 桑島治右衛門鑄